

# 近代日本版画家名覧 (1900—1945)

## 〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
  - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
  - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

|                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| 岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）  | 植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員） |
| 加治幸子（元東京都美術館図書室司書）   | 河野 実（元鹿沼市立川上澄生美術館館長） |
| 滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員） | 西山純子（千葉市美術館学芸員）      |
| 三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）      | 森 登（学藝書院）            |
| 樋口良一（版画堂）            |                      |

## 戦前に版画を制作した作家たち (26)

### 【や後半】

#### 山崎醇之輔 (やまざき・じゅんのすけ) 生年不詳～1970

東京本郷に生まれる。川端画学校に半年ほど学び、「土肥生輝」の号で詩・絵などを発表。1929年に東京浅草水族館余興場を本拠地に再結成された第2次カジノ・フォーリーでは「川崎醇」の名前で舞台美術を担当する。1930年代にはトーキー映画製作のP.C.L映画製作所から東宝映画に移り、その間多くの映画に美術監督として関わり、1942年には満映人形映画「夜明珠伝」の美術監督を担当。戦後は舞台美術から人形劇に転じ、人形劇団「童夢(どうむ)」を主宰し脚本・演出・装置・音楽などを手掛けた。1967年「日本人形劇人協会」設立に参加、副会長を務める。1970(昭和45)年9月逝去。版画は舞踏家石井猿の妹石井栄子を描いた木版画《石井栄子氏の奇形三稜鏡》(芸艸堂 限200 1936)が知られる。【文献】童夢人形劇編『人形劇脚本集』第5集(未来社 1967)／荒屋鋪透「三輪勇之助のダブル・イメージ」『三輪勇之助展』図録(三重県立美術館 1991)／『Light in Darkness Women in Japanese Prints of Early Showa(1926-1945)』Fisher Gallery, University of Southern in California 1996)／中村正昭「カジノ・フォーリーとモダン・エイジのアナキストたち」『明治大学大学院紀要 文学研究論集』14(2001.2) (樋口)

#### 山崎青樹 (やまざき・せいじゅ)

1937(昭和12)年の第6回日本版画協会展に木版画《曙》、翌1938年の第7回展にも木版画《大槍》が入選。出品時は東京に住む。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

#### 山崎荘一 (やまざき・そういち)

1935(昭和10)年の第22回光風会展に《明石風景》が入選。木版画と推定される。【文献】『第85回記念光風会目録集』(光風会 1999) (三木)

#### 山崎年信 (やまざき・としのぶ) 1857～1886

大蘇芳年に学び、主に関西で活躍した挿絵画家で西南の役戦争錦絵の制作も知られる。大野静方著『浮世絵と版画』(大東出版社 1942)によれば、「芳年門人、初め三世豊国門人、山崎氏、通称信二、田口徳三郎とも称す、名は勝洗、仙齋と称す、大阪住、明治十八年頃歿」とする。さらに、山田奈々子著『増補改訂木版口絵総覧』(文生書院 2016)によって補うと、安政4(1857)年生まれ、明治19年(1886)歿とし、「月岡芳年門下の俊秀で四天王の一人であったが、酒のために身を誤り、芳年の怒りに触れることをしたために破門された。大阪に行き、色々な新聞社で挿絵を描いた。仙齋、吞海、春香などと号す」とする。ちなみに、年信には田口年信(1866～1903)もあって、「田口年信の方は大阪に行って多くの挿絵、講談本の口絵を描いた」とする。1891年8月刊『なにはがた』第4冊に掲載の浪華文学会会員名簿には「田口年信(仙齋)」の名がある。山崎年信画の口絵では末広鉄腸の『玉手箱』(嵩山堂 1891)がある。没年に1年の差異があるが、『増補改訂木版口絵総覧』の記載に従った。【文献】大野静方『浮

世絵と版画』(大東出版社 1942)／山田奈々子『増補改訂木版口絵総覧』(文生書院 2016) (岩切)

#### 山崎正明 (やまざき・まさあき) 生年不詳～1938

1934(昭和9)年、長崎の郷土を愛する詩人や版画家たちは「詩と版画の会」(2号から「版画長崎の会」と改称)を組織し、版画・文芸同人誌『詩と版画』(内堀周通編)を創刊する。その第1輯(1934.2)に《庭》を発表。その後、巻次を継承して『版画長崎』(1934～1963 全7冊)と改題するが、山崎の版画の発表はない。阿野露団は著書の中で、同人として山崎の名前を挙げ、1938(昭和13)年に他界と記している。【文献】阿野露団「平塚運一(1)(2)」『長崎を描いた画家たち 上』(形文社 1988)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 山崎幸夫 (やまざき・ゆきお)

長野県須坂では小林朝治が中心となり、1933(昭和8)年に「版画及び図画講習会」(須坂小学校 講師：平塚運一)を開催した。それを契機に「信濃創作版画研究会」(1936年に「信濃創作版画協会」と改称)を立ち上げ、同年8月に版画同人誌『櫟』(1933～1937 全13輯)を創刊。その第1輯(1933.8)に《風景》、第2輯(1934)に《賀状》を発表する。翌1934年の「第2回版画及び図画講習会」(8.19～22 須坂小学校 講師：平塚運一)では臥龍山への写生会を行い、それを下絵に版画を制作。講習会を記念して『臥龍山風景版画集』(信濃創作版画研究会 1934)を発行した。山崎も参加し、制作した《弁天橋》が掲載されている。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥龍山風景版画集』』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 山路四方路 (やまじ・よもじ)

1929(昭和4)年の第9回日本創作版画協会展に木版画《風景》を出品。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (三木)

#### 山下新太郎 (やました・しんたろう) 1881～1966

1881(明治14)年8月29日東京日暮里の表具師の家に生まれる。1901年藤島武二に師事し東京美術学校撰科に入学。1904年卒業後、東京外語学校仏蘭西語学科選科に学び、のち暁星学校に転学。1905年フランス留学し、コラン塾に学んだ後、国立巴里美術学校に入学、フェルナンド・コルモンの指導を受ける。1908・09年の巴里サロンに《窓際》《読書》等を出品、1910年には代表作の一点《靴の女》を制作する。1911年6月帰国し、7月の第4回文展に滞仏作を出品、《読書の後》で三等賞を受賞。翌年の第5回展では《窓際》が三等賞を受賞する。1914年二科展創立に参加、以後1934年まで二科展に出品するが、翌年脱退。帝国美術院会員となる。1937年一水会を創立し、以後一水会を中心に出品すると共に、戦後は日展にも出品する。1955年文化功労章を受章。版画は、一水会の機関誌『丹青』第2巻第1号(1939.4)に石版《観劇》、第2巻2号(1939.9)に木版《紹差し》。戦後は加藤版の木版画《京都通天閣》《奈良春日神社回廊》《京都嵐山新緑》(1950年頃)など。絵画修復にも関心を示し、著書に『油絵の科学』(好学社 1948)がある。1966(昭和41)年4月11日東京で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和42年版(東京国立文化財研究所 1967)／『生誕100年 山下新太郎展』図録(ブリヂストン美術館 1981) (森)

### 山下大五郎 (やました・だいごろう) 1908～1990

1908(明治41)年10月2日神奈川県鎌倉郡村岡村(現・藤沢市弥勒寺町)に生まれる。1926年神奈川県立湘南中学校を卒業し、東京美術学校図画師範科に入学。在学中は田辺至に学び、1928年の第9回帝展に油彩画《卓上静物》が初入選。翌年同校を卒業し、神奈川県奈珂中学校に勤務。1930年の第11回帝展に再び入選。その後も帝展・新文展に油彩画を出品し、1937年第1回新文展の《中庭の窓》、1939年第3回新文展の《おもて》で特選を受賞。1942年の第5回新文展からは無鑑査出品となった。またその間、1941年の第1回創元会展に出品し、会員に推挙された。1944年歩兵補充兵として召集され、終戦後3年間、カスピ海沿岸で捕虜生活を送った後、1948年帰還。戦後は「創元会」を退き、1949年に「立軸会」を結成し、同展を中心に活躍。1983年には立軸展35周年記念展に出品した《安曇野春風》で第7回長谷川仁記念賞を受賞した。戦前の版画としては、1934年の第1回「郷土を描く」展(2.1～7 日本橋・白木屋 主催：日本図画手工協会)に木版画《藤澤の風揚げ》《東海道の松並木》《相模野を行く》を出品している。1990(平成2)年5月13日東京都で逝去。【文献】『物故者』『日本美術年鑑』平成3年版(東京国立文化財研究所 1992)／『第一回「郷土を描く」展覧会出品目録』(日本図画手工協会 1934)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

### 山下竹齋 (やました・ちくさい) 1885～1973

1885(明治18)年7月17日京都に生まれる。本名は覚太郎。1900年山元春挙に師事。1911年の第5回文展に《漁歌》が初入選、褒状を受け、以降第12回(1918)まで毎回出品。第10回展(1916)の《桃の里》では特選を受賞。その後は第5・8～15回帝展(1924・1927～1934)に出品(第10回では同展委員を務める)、第1～4・6回新文展(1937～1941・1943)に無鑑査出品。この間、第1・2回聖徳太子奉賛美術展(1926・1930)、文展招待展(1936秋)などに出品を続け、1944年の戦時特別展の《日本(ひのもと)》が最後の官展出品となる。山水画を得意とした。1973(昭和48)年逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921 限300部)に《義徒、小夜の中山を越ゆるの図》の1図がある【文献】『義士大観 内容一斑』(義士会出版部 1921)／『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)／『山田書店新収美術目録』81(2008春) (樋口)

### 山下楯生 (やました・なるお)

大分県師範学校図画教師武藤完一は、1933(昭和8)年に平塚運一の2回目となる版画講習会(8.1～5 大分県師範学校)を開催する。これを契機に主宰している版画同人誌『彫りと摺り』を九州全土に広める意図で誌名を『九州版画』と改題する。山下はその第8号(1935.10)に《溪流》、第9号(1936.1)に《かんらん》、第11号(1936.7)に《橋のある風景》、第14号(1937.4)に《風景》、第16号(1937.10)に《風景》、第20号(1939.11)に表紙絵《柿》を発表。「楯男」の表記もあり。第24号(1941.12)の会員名簿には「満州国浜江省珠河県元賓鎮」に在住と記載されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

### 山下幸雄 (やました・ゆきお)

西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』(1932～1943 全125冊)第62号(1937.12)に木造の建物を描いた銅版画を発表。肩書きには「北海道岩見沢高女4年生」とあるが、名前の「幸雄」からは男子と考えられる。「岩見沢中学校」の間違いか、詳細は不明。【文献】『エッチング』62(加治)

### 山田 (やまだ)

名は不明。1930(昭和5)年の第3回プロレタリア美術大覧覧会に版画《デモ》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

### 山田 篤 (やまだ・あつし) 1902～1955

1902(明治35)年東京市(一説に香川県)に生まれる。本名は篤太郎。本郷洋画研究所に学び、1929年の第16回光風会展に油彩画《海への道》が初入選。翌1930年には、第17回光風会展に油彩画《南総風景》、第7回白日会展に油彩画《南総風景》《南総曇り日》と水彩画《裸婦(素描)》が入選。白日会展へはその後も出品し、第9回展(1932)に油彩画《房州風景》、第10回展(1933)に水彩画《シーサイドパーク》が入選した。また、第一美術協会展(1929結成)への初入選は不明であるが、1935年12月の名簿(「美術家及美術関係者名簿」『日本美術年鑑』昭和11年版)には「会友」とあるのでそれ以前からの出品であろう。その後、1938年に会員に推挙されている。因みに当時の住所は「浅草区千束町1ノ16」。以後、同展で活躍したほか、聖戦美術展の第1回展(1939)・第2回展(1941)、海洋美術展の第4回展(1940)・第5回展(1941)・第6回展(1942)、航空美術展の第1回展(1941)・第2回展(1942)、大東亜戦争美術展の第1回展(1942)などにも油彩画・水彩画などを出品したが、1939年の第1回聖戦美術展に出品した2点の内の1点、《故郷の話》は石版画であった(「版画消息」『日本版画協会会報』31による)。戦後は、再び第一美術協会展に出品したが、1950年には「一線美術」の創立に参加した。参加時の住所は「東京都墨田区寺島町7ノ63」。1955(昭和30)年逝去。【文献】「美術家及美術関係者名簿」『日本美術年鑑』昭和11年版・昭和14年版(美術研究所 1936・1940)／『現代美術家総覧』(美術年鑑社 1944)／『日本版画協会会報』31(1939.9)／『復刻版 聖戦美術』上(国書刊行会 1978)／『20世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社 1998)／『白日会展総出品目録<第1回～第59回>』(白日会 1984)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

### 山田介堂 (やまだ・かいどう) 1869?～1924

1869(明治2)年福井県丸岡町に生まれる(明治3年の説もある)。12歳の時に町内に寄寓していた長崎の南画家王延章に南画の手ほどきを受ける。その後、京都で田能村直入・富岡鉄斎に師事し、日本美術協会・巽画会・京都美術協会の会員となる。第5回文展(1911)に《萬竿烟雨》が初入選、褒状を受け、その後も第6回(第一科)・第7回(第一科)・第8回展(1912～1914)に出品。1921年には京都の若手作家水田竹園・河野秋邨・三井飯山らとともに「日本南画院」を結成し、池田桂仙・河野竹邨とともに「京都南画壇の三元老」と称された。後年、片目が失明したため、「隻玉道人」と号す。1924年同院

を脱退。同（大正13）年9月17日京都市で逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部 1921 限300部）に「祇園島原 里げしき」1図がある【文献】『義士大観 内容一斑』（義士会出版部 1921）／『20世紀物故日本画家事典』／（美術年鑑社 1998）／『山田書店新収美術目録』81（2008春）（樋口）

#### 山田邦義（やまだ・くによし）

1933（昭和8）年に和歌山県新宮で結成された「全熊野美術協会」の「版画部」に所属。第1回展の目録は不明だが、1934年の第2回全熊野美術展（5.11～14 新宮公会堂）に木版画《マッチペーパー》《東京風景》《静物》を出品している。【文献】『第二回全熊野美術展目録』（1934）（三木）

#### 山田敬中（やまだ・けいちゅう） 1868～1934

慶応4（1868）年4月2日東京浅草聖天町（吉野町ともいう）に生まれる。本姓名は島根忠蔵。可得の号もある。1881（明治14）年寺部小学校を卒業。1884年から俳諧及び漢学を旧水戸藩士林誠翁に学ぶ。1886年月岡芳年の門に入り、浮世絵人物画を学び、「年忠」「南窓」「南斎」を号とする。1889年の日本美術協会青年絵画共進会へ《年の市図》を出品し、四等賞受賞。1890年から『江戸新聞』の江戸新聞社に入社し、雑報欄等の挿絵を描く。師芳年の方針で他派も学ぶこととなり、1891年からは川端玉章の門に入り円山派（四條派）の写実を学び山水・人物に長じた。玉章と橋本雅邦のきもいりで同年9月に深川の玉章宅が日本青年絵画協会事務局となったことにより、同年10月には幹事となって事務局長の下で働いた。11月には臨時研究会審査書記を務めると共に《黄瀬川陣営義経調頼朝》を出品し一等褒状を受ける。1892年第1回青年絵画共進会に《伯牙三位聴秘曲図》で一等褒状、翌年にも一等褒状、1894年には審査員となって出品し、青年画家の泰斗として活躍。1896年の第1回日本絵画共進会では《浄穢界図》で銅牌受賞。11月からは東京美術学校美術工芸科嘱託として授業を受け持つが、1898年の美術学校騒動で依願解雇。岡倉天心創立の日本美術院の正員となり、第5回日本絵画協会・第1回日本美術院連合絵画共進会への出品が銅牌受賞。同年の12月には金沢工芸学校の教諭として石川県に赴任。1907年第1回文展開催時に東京に戻り、文展に《華の密》《桃園三傑》《孤村の夕》《朝霧》《唐美人》などを出品。帝展第14回まで連続して作品を出品した。1934（昭和9）年1月21日逝去。版画（錦絵）制作として1887年に大判錦絵三枚続《憲法発布祝典祭西丸下奉迎之図》（年忠画・版元勝木吉勝）、《東京名所吾妻橋鉄橋之全図》（年忠画・版元岡本懐徳）など。1889年には《向嶋 隅田堤観桜之図》（南斎年忠画・版元勝木吉勝）などがあり、このころは新聞附録画の制作も行っている。【参考】大野静方『浮世絵と版画』（大東出版社 1942）／細野正信・松浦あき子編『作家評伝』『日本美術院百年史』一卷上（日本美術院 1989）（岩切）

#### 山田 繁（やまだ・しげる） 1912～没年不詳

1912（大正元）年7月23日静岡県庵原郡西奈村（現・静岡市）瀬名に生まれる。1931年、近所に住む中川雄太郎の主宰する「龍南芸術研究会」が開いた「かけたつば美術展」（10.17～18 西奈尋常高等小学校）に油彩画《自画像》《静物》《薔薇》《長尾風景》を出品。また、同研究会の版画誌『かけた壺』第14号（1931.11）にも木版画《静物》《風景》を発表した。その後の油彩画の発表は不

明であるが、木版画は『かけた壺』第15～20号（1932.1～1934.4）・第22号（1934.6）・第23号（終刊号 1934.7）に発表している。一方、翌1932年には中川の紹介で「童土社」同人となり、版画誌『ゆうかり』第8号（1932.5）に《竜南風景》を発表。また、「童土社」の主催する第4回展（5.7～9 静岡・すみや）にも《龍南風景》《狐ヶ崎風景》を出品。その後も『ゆうかり』の第9～24号（1932.7～1934.12）・第26号（1935.3）・第27号（1935.4）・第30号（終刊号 1935.8）に発表したほか、第5回展（1933）に《龍南風景》《河口湖（一）》《河口湖（二）》《裸婦》《夏の雲》《大崩風景》、第6回展（1934）に《龍爪山》《龍南風景》《山》を出品。第7回展（1935）・第8回展（1936）・第9回展（1938）の目録は未見であるが、出品を続けたようである。またその間、青森の『陸奥駒』第16集（1934.12）にも木版画《年賀状》を発表している。1939年、農業が忙しくなり「童土社」を退会。その後は版画制作から離れた。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』／「静岡県版画協会年史」『第50回記念版画集—県版画50年の歩み—』（静岡県版画協会 1985）／『静岡の創作版画』（静岡県立美術館 1991）／『創作版画誌の系譜』（三木）

#### 山田信一（やまだ・しんいち） 1907?～1996

1907（明治40）年生まれか。1942年の第11回日本版画協会展に木版画《参道》が初入選。その後も同展に出品し、翌年の第12回展に《法政大学附近》《装蹄》が入選。1944年には会友に推挙され、同年の第13回展に《老人》《庭》を出品した。その間、1943年発足の「日本版画奉公会」会員。自宅は「東京市城東区大島町」にあったが、1945年3月10日の東京大空襲に遭い、千葉へ疎開。戦後は東京都江戸川区江戸川5丁目に住む。日本版画協会へは、再開展である1946年の第14回展に《寺》（木版）《母子像》（木版・合羽版）を再び出品し、会員に推挙された。以後、亡くなるまで会員として名を連ねたが、展覧会は不出品も多く、現在出品が確認できるのは第15～17・20・26～36・39・40回展（1947～1949・1952・1958～1968・1971・1972）で、木版画や拓摺りによる作品を発表している。1996（平成8）年7月3日東京都で逝去。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『日本版画協会会報』37（1944.9）・1946.2・1946.3・109（1996.11）／『エッチング』124（三木）

#### 山田隆憲（やまだ・たかのり） 1893～1953

1893（明治26）年3月1日熊本県飽託郡供合村（現・熊本市）に生まれる。1911年熊本県立中学済々黌を卒業。上京し、葵橋洋画研究所に学ぶ。翌1912年東京美術学校西洋画選科に入学。在学中、1916年の第4回光風会展に《小扇》《夜》が入選。同展へはその後も出品し、第6回展（1918）・第8回展（1920）に入選した。1917年同校を卒業し、研究科に進む。翌1918年の第12回文展に《真夏》が初入選。以後、官展作家の道を歩み、改組された帝展の第1・2回展（1919・1920）、第5～7回展（1924～1926）、第9～11回展（1928～1930）、第15回展（1934）と入選を重ねたほか、1921年の第2回中央美術展、1922年の平和記念東京博覧会、1926年と1930年の第1・2回聖徳太子奉讃美術展などにも出品した。版画は、1929年の第9回日本創作版画協会展にモノタイプの《花》《猫》、第6回白日展に油彩画《風呂》とともに版画《アルヘンチーナの舞踏》（版種不明）を発表。また、同年の第1回実用版画美術協会展（12.7～12 上野・松坂屋）にも同人として出品した。

なお、白日会はこの年に会友、翌1930年に会員となるも、1934年には退会し、帰郷。この頃より右手にけいれんの症状が現れたが、昭和11年文展招待展(1936)に招待され、第1～4回新文展(1937～1941)に無鑑査出品した。戦後は、1946年に結成された「熊本県美術協会」の創立会員となったが、右手が使えず、左手での制作となったという。1950年には第2回熊本県近代文化功労者として顕彰された。1953(昭和28)年2月19日熊本市で逝去。【文献】『第7回熊本の美術展 熊本の近代洋画』図録(1982 熊本県立美術館)／『白日会史Ⅰ』(白日会 1979)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい 1992)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

#### 山田 武(やまだ・たけし) 1912～没年不詳

青森では1930年に最初の版画同人誌『緑樹夢』が青森中学校の生徒によって発行され、当地の若い洋画家たちに刺激をあたえた。彼らは「青森創作版画研究所」を組織し、版画同人誌『彫刻刀』(1931～1932 全17冊)を創刊。山田はその第5号(1931)に《自籠の入江》、第6号(1932)に《田舎》、第7号(1932)に《スキー》、第10号(1932.5)に《漁船》を発表した。【文献】『緑の樹の下の夢 青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 山田馬介(輔)(やまだ・ばすけ) 1871?～没年不詳

1871(明治4)年頃(明治3年頃の説もあり)、東京に生まれる。英語名では「フカワ・ジーン・バスケ(Fukawa・Jine・Basuke)」と称す。16歳の頃に渡米。ニューヨークやフィラデルフィアの実業学校に学ぶ。1895年頃帰国し、横浜で画塾「バスケ・スケッチング・クラス」を開き、横浜生まれの日本画家今村紫紅などに水彩画を教える。また横浜に寄港する外国人向けに「輸出画」などを描く。その後、1897年に再び渡米。1899年にかけてミネアポリスの美術学校やフィラデルフィアの「スクール・オブ・デザイン」などで水彩画や素描・絵画の指導を行う。1902年に帰国し、横浜で「横浜スケッチ倶楽部」という画塾を開き、水彩画展を開催。1910年に横浜で画廊を経営、自身の水彩画とともに浮世絵版画なども販売した。その後は日本と米国の間を往復していたようで、1914年に帝国ホテル(2.21～23)、1916年に帝国ホテル(4.21～23)、1917年に〔神戸〕オリエンツ楼上(12.2～8)、1918年に大阪ホテル(3.21～24)で個展を開催。また1911年と1925年にアンダーソン・ギャラリー、1928年にアメリカン・アート・ギャラリー、1934年にウィレム・ホルスト・ギャラリーなどと、いずれもニューヨークで個展を開催し、日本の風景を夢幻的に描く水彩画家として同地でも知られる存在だったようだ。ただ、その後の消息は不明で、1938(昭和13)年以降に逝去したのではないかとされている。山田はニューヨークの個展などでは浮世絵版書の販売も行っており、自身も昭和初頭に「芋水画房」(1924年金子芋水が創業)から《羽田大師の渡》《月夜の品川》2点の木版画を制作している。なお、名前の表記について、「山田馬輔氏展覧会」(「展覧会巡り」『美術週報』3-2 1915.9.14)、「山田馬輔油絵展覧会」(「美術界消息」『中央美術』2-6 1916.6.1)、「山田馬輔氏水彩画展覧会」(「春の二展覧会」『みづゑ』159 1918.5)のように大正期の美術雑誌では「山田馬輔」の表記が見られ

るが、現在は「山田馬介」が一般的な表記となっているようである。【文献】楠崎宗重編『秘蔵浮世絵大観 ムラー・コレクション』(講談社 1990)／『アメリカに生きた日系人画家たち 希望と苦悩の半世紀 1896-1945』展図録(東京都庭園美術館 1995)／『20世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社 1997)／『山田書店新収目録』29・73(1997.7-2006秋)(樋口)

#### 山田美穂(やまだ・びと) 1887?～没年不詳

1887(明治20)年生まれか。1924年に佐藤章太郎商店から木版画《八坂の舞妓》《清水寺夕景》の制作がある。【文献】『日本の版画Ⅲ 1921-1930』展図録(千葉市美術館 2001)／『版画堂目録』112(2016.6)(樋口)

#### 山田明治(やまだ・めいじ)

1933年、長野県須坂では小林朝治を中心にして「版画及び図画講習会」(須坂小学校 講師:平塚運一)を開催。これを契機に「信濃創作版画研究会」(1936年に「信濃創作版画協会」と改称)が組織され、同年8月に版画同人誌『櫟』(1933～1937 全13冊 戦後復刊)を創刊。その第1輯(1933.8)に《夏山》、第2輯(1934)に《賀状》を発表した。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

#### 山中古洞(やまなか・こどう) 1869～没年不詳

主に『挿絵節用』の著者、明治期の挿絵画家、さらに渡辺版画店からの新版画作品制作でも知られる。大野静方著『浮世絵と版画』(大東出版社 1942)では、「山中氏、名は升、本姓佐藤氏、山中家に養はれて其の姓を冒す、明治二年七月十日東京麹町区永田町に生る、月岡芳年、熊谷直彦、在原古玩、石原白道の諸家に就て画技を修め一格を出す。明治二十八年第四回内国勸業博覧会に出品して褒状を得、三十四年研究団体として烏合会を越し、絵画の発展向上に盡した、同志には、鍋木清方、都築真琴、阿出川眞水、田中素水、竹田敬方、河合英忠、鯉崎英朋、高田鶴僊、吉川靈華、村岡應東、山村耕花、福永公美、須藤宗方、池田輝方、池田蕉園、大野静方などあり、年々展覧会を開催し、研究作品を出陳して研鑽大いに努めた、博文館に入り各雑誌小説等の挿画口絵、其他の新聞挿画など頗る多く、明治版画界の先輩として重きをなした。」と示されている。1896(明治29)年ごろは読売新聞社に入社して挿絵を描いていたとの説もある。また、『此花』第三枝(1910.3)掲載の「現代浮世絵師」で補うと、その1910年の時点で42歳、住所は「東京市芝区二本榎二丁目二十八」とする。また、日本の挿絵史、とくに自らも身を置いた明治以降の近代挿絵界の実情を踏まえて述べた『挿絵節用』(芸艸堂 1941)の名著でも知られる。『エッチング』124号(1943.5)の「版画奉公会会員名簿」に住所が「中野区仲町十二」とする消息を最後に、1945(昭和20)年没としているものもあるが、根拠は明らかでなく、没年はわかっていない。1894年から1915年にかけて、『芸文倶楽部』『新小説』等の雑誌での口絵・挿絵で活躍。単行本木版口絵作品もある。また新版画の渡辺版画店からは「辰重」の落款で1929年に、映画女優シリーズ(大判)『森律子』《田中絹代》《酒井米子》《栗島澄子》《八雲恵美子》《鈴木澄子》などを出す。他に、1930年『浮世絵志』(9.1)の編集後記「浮世絵多興里」によれば、独創挿絵「中古役者六家撰」(錦絵独創社 彫・馬場司郎)第一

作「四代目団十郎が市川三光に扮した大首絵」が出版になったことを伝えている。また、『皇紀二千六百年記念版画集』(1939)に木版画《伊勢大廟》が入っている。【文献】大野静方『浮世絵と版画』(大東出版社 1942)／『おんなえ 近代美人版画全集』(阿部出版 2000)／『山田書店新収目録』95 (2010) (岩切)

### 山中徳次 (やまなか・とくじ) 1913～2000

1913 (大正2)年鳥根県松江市奥谷町326番地に生まれる。1928年に鳥根県師範学校本科に入学し、1933年には専科へ進学。在学中は池田興雲・坂本一男に絵画指導を受ける。1934年同校を卒業。鳥根県美濃郡鎌手小学校の訓導となったのを皮切りに戦前戦後を通じて、小学校や中学校の教員に従事する。1966年には鳥根県八束郡玉湯中学校の校長となり、1970年に退職。その間、1935年に第5回独立美術展に初入選となり、以後戦争時と病気(腰椎カリエス 1946～49)を除き毎回出品する。1942年に上京し、杉並区阿佐ヶ谷に住居を置き、東京都杉並第五小学校の教員となる。1943年12月に臨時召集され、1945年3月には召集解除となった。故郷の松江(松江市奥谷町)に戻り、松江市中原国民学校の教員を勤める。1945年、三上知二・岩佐新・木村義男・平塚運一・草光信成らと「鳥根洋画会」を結成し、後年は常任委員長も務める。1950年には独立美術協会会長、1972年に会員となり、1982年に『山中徳次画集』(山中徳次画集刊行委員会)を上梓。1989年には第14回個展「喜寿記念山中徳次近作展」(紫泉ギャラリー)を開催する。2000(平成12)年8月11日逝去。

版画制作については、師範学校時代に同じ松江出身の平塚運一が東京で版画の研究と普及のために発行した『版画研究』第1巻1号(1932.3)に木版画《焼跡》を発表。また同時期に料治熊太が発行した版画同人誌『版芸術』(1932～1936 全58号)の第15号(1933.6)全国郷土風俗版画集に出雲風俗として《魚売り女》を発表する。その後、武井武雄が主宰する年賀状交換会「襟の会」(第2回までは「版交の会」)に第6回から第10回(1940～1944)に参加となっているが、第10回は召集のため年賀状を送ることでできず、戦後は復員してから第12回・第13回(1946・1947)に出品している。【文献】「年譜」『画業六十年 山中徳次自選展』図録(山中会 1993)／『独立美術協会80年史』(独立美術協会 2012)／『創作版画誌の系譜』(加治)

### 山根武士 (やまね・たけし)

1929(昭和4)年の「京都創作版画会」第1回展(2.1～5 京都・大丸)に木版画《東山小景》《習作》《海浜風景》を出品。1932年には大月文一らと「全市学童創作版画実技講習会」の指導にあたった。当時、京都市修道尋常小学校に勤務。なお、この講習会に続き、「第1回全市学童創作版画展」(3.25～29 京都・丹神百貨店)も開かれたが、その開催にも尽力したと思われる。その後、1944年の平安神宮御鎮座50年・平安遷都1150年奉祝京都市美術展洋画展に油彩画《あざみ》を出品した。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録』[京都創作版画会第一回展覧会] (京都創作版画会 1929)／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要』12(京都府総合資料館 1984)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

### 山内神斧 (やまのうち・しんぷ) 1886～1966

1886(明治19)年8月26日大阪の南区安堂寺橋に生まれる。本名は金三郎。1904年画家を志し、上京。梶田半古に入門。翌年東京美術学校日本画撰科に入学。1910年同校を卒業し、紅児会第の13回展(1910)・第14回展(1911)に出品。1911年大阪に戻り、結婚。新町通で美術品店「吾八」(第一次)を開業。翌年平野町に移る。大津絵・泥絵・郷土玩具などのほか、新しい日本画・洋画・工芸品なども扱い、森田恒友・織田一磨・富本憲吉らの展覧会を開催したが、1915年には店を譲渡し、大阪府豊中で画業に専念。同年の第1回大阪美術展に《夕月》を出品。また、京都の星野空外・不動立山・玉村方久斗らと日本画研究会「蜜栗会」(みつりつかい)を結成した。この年か、単身上京。翌1916年の再興美術院第3回展に落選するも、第10回文展に《豊神酒》(二曲半双)が入選。その後か、家族を呼び寄せる。1920年には高木長葉・矢部季・三宅白鈴と「蒼空邦画会」(そうくうほうがかい)を結成し、1921年・1922年に展覧会を開催。1922年には「第一作家同盟」の結成に参加するも、第1回展出品後に退会。同年、1918年頃からコマ絵などを描いていた「主婦之友社」に美術記者として入社。編集・事業企画も担当し、その後監査役、取締役となり、1936年退社した。1937年には今村秀太郎(1907～1994)の協力を得て、第二次の「吾八」(1937.4～1944.4 強制疎開により閉店)を東京・西銀座に開き、趣味誌『これくしょん』(1937.4～1943.6 編集発行人は4号まででその後は今村が担当 64号で休刊)を刊行。また同年、小林一三に招かれ、大阪・阪急百貨店の美術部囑託となり、東京・大阪を行き来しながら美術部のPR誌である美術雑誌『阪急美術』(1937.10～1941.6)の創刊に参加。同誌は、『汎究美術』(『阪急美術』改題 1941.7～1942.3)『美術・工藝』(『汎究美術』改題 1942.4～1944.12)『日本美術工藝』(『美術・工藝』改題 1945.1・1945.10～1997.1)と名前を変えながら継続されたが、1947年7月まで編輯兼発行人を務めた。その間、1940年に兵庫県西宮市へ居を移し(のち尼崎市へ)、1941年には阪急百貨店内に古書店「梅田書房」を設立した。戦後は、梅田書房を拠点に活動を再開。1947年からは『これくしょん』(梅田書房版 1947.2～1957.2 102冊)を刊行。また、1957年12月に再び今村秀太郎を支配人に迎え、第三次の「吾八」を東京・有楽町に開店。また、『これくしょん』(吾八版 1958.10～1986.11 100号・通巻156号で終刊 編集発行人:今村秀太郎)も再刊している。

版画は、第一次「吾八」時代の1914年から翌年にかけて、外国の玩具を画集にした自画・自刻・自摺の版画集『壽々(Jou jou)』(木版墨摺・手彩色 全2冊 吾八 50部限定)を刊行。また1918年には、職人の手を借り、手彩色部分を木版多色摺に改めた芸艸堂版『壽々(Jou jou)』(木版多色摺 和装綴本 2冊 100部限定/1994再刊 150部)として出版された。その後も各国の玩具を主題にした版画集を「壽々」のタイトルで数次にわたり刊行したが、現在確認されているものに、1920年の日本葉書会版『壽々』(木版多色摺 和装本)、1922年から1924年にかけて刊行した私家版『壽々』(自画・自刻・自摺 和装本 半紙版二つ折り5枚一組袋綴 20冊 50部限定)、1935年から1937年にかけて刊行した私家版『壽々』(『壽々 南洋の人形と玩具』『壽々 インドとビルマの人形と玩具』など全5輯 袋綴 200部限定)、さらにこの『壽々』を1958年に再刊した『壽々』(印刷に手彩 全5輯 袋綴 150部限定)などがある。その他、1924年に神戸の山口久吉

が主催する『HANGA』第2輯(5.20)に木版画《瓶》を発表。1941年には佐藤米次郎が主催した「蔵書票展」(10.16～19 京城・三越)に特別出品した。また、第二次の「吾八」時代(1937.4～1944.4)には、『これくしょん』の多くの表紙を自作の版画で飾り、また神斧の原画による木版の蔵書票・年賀状などの会員を募集している。1966(昭和41)年12月28日兵庫県尼崎市武庫之荘1丁目にて逝去。主な著書に『大津絵集』(吾八 1912)『富本作陶印譜』(私家本 1950)『甘辛画譜』(龍星閣 1956)『小林古径画集』(共著 中央公論美術出版 1960)などがある。【文献】山内十三「年譜」『これくしょん 山内金三郎・追悼』31(1967.2)／畑野栄三「山内神斧と『寿々』の時代」『寿々』(芸艸堂出版部 1994)／丹尾安典「山内神斧のこと一石井桃子君の追跡―『一寸』2(書痴同人 2000.5)／「特輯 玩具文献」『浪速書林古書目録』13(1985.12)／『大正日本画 その闇ときらめき』展図録(山口県立美術館 1993) (三木)

### 山林文子(やまばやし・ふみこ) 1910～没年不詳

1910(明治43)年大阪府中河内郡長瀬村(現・東大阪市)金岡に生まれる。学歴などは不明であるが、日本画を土田麦僊に学び、主に大阪で発表。大阪美術展・大阪女流画家展(1933)などに出品したようである。一方、木版画は琴塚英一に指導を受け、1935年の第13回春陽会展に《草花》、第4回日本版画協会展に《草花》《ばら》がそれぞれ初入選。翌年も第5回日本版画協会展に《シクラメン》が入選。以後同展へは、第6回展(1937)を除き、1938年の第7回展から1944年の第13回展まで毎回出品。その間、1936年のサンフランシスコ・ロンドンなど欧米9都市を巡回した「日本現代版画展」にも出品。1940年の第9回展で会員に推挙され、協会が企画した1943年4月と翌年10月のカレンダーも担当した。このほか、目録などで出品の確認できる公募展としては、1936年の第5回新興美術展(大阪・新興美術協会)に《花とランプ》《バラ》、第9回展(1940)に《少女》《働く手》を出品。その後、同会の会友になった。また、1937年の第12回国画会展に《花》、1938年の第2回新文展に《ダリヤ花》、1941年の第19回春陽会展に《温室ノ花》、第20回展(1942)に《甲冑》《秋草》、第21回展(1943)に《静物》を出品している。1943年「日本版画奉公会」会員。1945年には武井武雄の主宰する年賀状交換会である第11回「榛の会」の会員になった。戦後は、再開した1946年の第14回日本版画協会展に《けし》《薊》を出品し、1964年の第32回展まで出品したが、その後の消息は不明。なお、1964年頃の住所は「大阪府布施市金岡182」である。【文献】「新会員略歴」『日本版画協会々報』35(1942.8)／『第5回新興美術展覧会出品目録』(1936)・『第九回新興美術協会出品目録』(1940)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／市道和豊「[軌跡の成立]―榛の会昭和21年―芸術集団の戦中・戦後―」(室町書房 2008) (三木)

### 山村耕花(やまむら・こうか) 1885～1942

1885(明治18)年12月東京品川に生まれる(生年月は『日本美術年鑑』および「山村耕花先生略伝」『帝都画伯大観乾』(東京会 1922)より)。「絵画清談」4-6の「山村耕花画伯小伝」では明治19年1月2日と、添田達嶺「逝ける山村耕花氏」『国画』2-3(1942.3)では明治19年1月とされている。本名は豊成(とよしげ)。1900年頃より3年

間ほど尾形月耕に学び、その後東京美術学校日本画科撰科に進む。川端玉章に就き、1907年卒業。同年の第1回文展で《茶毘》が入選、第4回展では《大宮人》が褒状となる。さらに第7～9回展でも入選を果たし、9回展の《春》で三等賞を獲得した。一方、第9回展と同年の1915年に「珊瑚会」を結成して第1～6・8・10回展に参加。また1916年からは文展を離れて院展に転じ、第3回展に出品した《業火と寂光の都》が好評を得て同人に推挙される。以後1939年の第26回再興院展まで出品を続けた。ほかに1930年の第2回聖徳太子奉讃美術展覧会に出品した《うんすん歌留多》や1936年の改組第1回帝展に出品した《大威徳明王》なども高評価を得ている。歴史画から当世風俗まで取材は幅広く画技も多彩、舞台装置も手がけ、浮世絵や大津絵、中国古陶磁、南蛮屏風、蒔絵等の蒐集家としても知られた。1942(昭和17)年1月25日東京・聖路加病院にて逝去。

版の仕事としては、まずは1909(明治42)年頃に始まる雑誌のコマ絵や口絵がある。それらは1911年にまとめられた『絵日傘：少女画集』(金盛堂)に見るように、初期は竹久夢二の影響を感じさせるものが多いが、次第に写生に基づいた独自の作風に展開する。1911年三越呉服店懸賞広告図案に当選、1913年12月刊行の『コロロミ』1年1号に石版画で参加(発行は石倉重継の日本版画会)、1914年6月「自画・自刻」作品による、あるいは「自画・自刻」作品を含む版画展覧会を琅玕洞で開催。1915年、名取春仙や石井柏亭とともに木版役者絵集『新似顔』に参加(彫摺は伊上凡骨)。同年、柏亭とふたりで「当世婦人百態」をコロタイプ印刷で会員頒布する企画に着手か(申込所は矢吹高尚堂内近代版画会)。1916年3月、大阪三越における「新古木版陳列会」に出品。同年、自室にかけてあった作品が渡邊庄三郎の目にとまり、《十一代目片岡仁左衛門の大星由良之助》で新版画制作を開始。以後、名取春仙とともに渡邊版役者絵の二枚看板を担い、同作に続き《四代目尾上松助の蝙蝠安》(1917)《七世松本幸四郎の関守関兵衛》(1919)《段四郎の鉄心齋》(1919)の優品3点を発表。さらに、1920年から22年にかけて「梨園の華」シリーズ12点を完成させ、役者の個性と役柄の心理描写にまで踏み込む鮮やかな手腕を見せて代表作とした。関東大震災で版木を焼失し、1924年からは山村耕花版画刊行会を立ち上げ、役者以外にも静物や風景、当世風俗へと取材を広げ、また版式も木版だけでなく石版画やジंक版へと展開させた。同会の趣意書では「梨園の華」シリーズが「第一回版画刊行会」とされており(『版画藝術』第11号所収渡邊規テキストより・現物は未確認)、渡邊版であってもあくまでも画家主導であったことを想像させる。趣意書にはまた、版画の落款について、錦絵風の木版画には「豊成画」、肉筆と同じ筆致のものには本落款の「耕花」、ペンや木炭・鉛筆によるデッサンを亜鉛版やオフセット版にしたものには略落款「花」を使用すると述べられている。渡邊版以降の制作については、渡邊規「大正初めの木版画作品(一)」に「山村耕花(豊成)作品目録」があり(『版画藝術』第11号テキストに再録)、これが耕花の一枚摺の概要であろう。ほかに、中島青果堂版の柱絵シリーズ「五節句遊び」(1917、彫りは伊上凡骨。初作《若菜》のみ完成し、《菊の節句》《桃の節句》《端午》《七夕》は未完か)、1917～18年の《新浮世絵美人合 二月 寒空》、1922年の《丹波与作の関の小万》(『大近松全集』第四巻付録)がある。1927年に「山村耕花氏木版画刊行会」より東京夏汀堂版24点の刊行が全タイトルとともに

告知され（『柳屋』第32号など、ただし旧作を含む）、夏汀すなわち永見徳太郎の援助があったと推測され、同年6月には関連展示も行われたことが判明するが、詳細はわからない。版の仕事としてさらに、谷崎潤一郎『お艶殺し』（千章館 1915）や永見徳太郎『阿蘭陀の華』（四紅社 1925）、邦枝完二『歌麿をめぐる女達』（新潮社 1931）、雑誌『浮世絵志』（1929年創刊）などの装幀や邦枝、大佛次郎、海音寺潮五郎らと組んだ挿絵を数えることができるだろう。【文献】山村耕花「私の蒐めた大津絵」『絵画清談』4-6（1916.6）／山村耕花「新版画の制作に就いて（制作講座）」『中央美術』11-2（1925.2）／『日本美術年鑑』（美術研究所 1943）／渡邊規「大正初めの木版画作品（一）」『版画界』（1953.1）／渡邊規「役者似顔絵と耕花の作品」『版画藝術』11（1975.10）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』／『浮世絵モダン 深水の美人！ 巴水の風景！そして…』展図録（東京新聞 2018）（西山）

#### 山村武子（やまむら・たけこ）

朝井清が主宰する「呉版画倶楽部」（1936.5頃結成）の会員。参加時期は不明だが、1939（昭和14）年6月の第2回呉版画倶楽部展に出品した。【文献】『日本版画協会会報』31（1939.9）（三木）

#### 山本磯一（やまもと・いそかず） 1895？～没年不詳

1895（明治28）年頃の生まれか。出生地について日本か台湾かは不明だが、本籍地は愛知県。中学校卒業後、台湾の「国語学校」（公学校〔小学校〕の教員養成を目的とする学校で、中学校卒業の学歴を持つ日本人は師範甲に所属し、在学期間は1年）に学び、「新竹」（台湾北西部）の公学校に勤める。その後、1920年東京美術学校図画師範科に入学し、1923年同校を卒業。同年台湾に戻り、台南師範学校の図画教諭となる。傍ら、台湾美術展覧会の西洋画部に第1回展（1927 出品作は《家》無鑑査）から第4回展（1930）まで出品。1931年8月に東京美術学校で開催の夏期講習会（日本水彩画会主催）の夜間エッチング講習会にも参加。1932年には日本エッチング研究所製エッチングプレスを所有し、『エッチング』誌第7・9・11・12・15・26・30号（1933.5～1935.4）に《安平風景》《台湾風景》《春》等のエッチング作品が掲載される。また、日本エッチング作家協会創立会員（準会員）として、第1回日本エッチング展覧会（1940.12.10～13 銀座・資生堂画廊）に《風景》、第2回展（1941.5.15～18 銀座・資生堂画廊）に《台湾風景》、第3回展（1942.7.21～26 上野・松坂屋画廊）に《台湾風景》を出品したほか、武井武雄主宰の「第1回版交の会」（1935）の会員に名を連ね（第1回のみ）、清永完治が朝鮮釜山で発行した版画誌『朱美の会版画集』の創刊号（1940.5）にエッチング《顔の習作》を発表している。当時の住所は「台南市開山町3-173」。1933年に自宅で「台南エッチング講習会」（7.24）を開催したが、南門小学校の日本人教諭3名（山路曠・後藤正治・西山員夫）と公学校勤務の5名（許錦林・許丙丁・陳賛昆・大友治・稍雅祐）が参加している。【文献】山本磯一「（わが師範22）台南師範学校」『造形教育』7-7（教育美術振興会 1941.7）／『エッチング』1・7・9～12・15・26・30・96・101・114／辻（川瀬）千春「植民地期朝鮮における創作版画の展開（5）-釜山における清永完治と日本人の趣味家ネットワークによる創作版画誌『朱

美』の刊行について-」『名古屋大学博物館報告』32（2017）／『創作版画誌の系譜』（樋口）

#### 山本一郎（やまもと・いちろう）

1925年頃の愛知県岡崎では洋画や版画への関心が高まり、1925年3月、村松隆次と小野英一は版画同人誌『版画』を創刊する。第3号からは短歌の同人誌『草原』と合併し、版画同人誌『試作』（1925～1926 全6号）と改題。山本はその第2年2号（1926.5）に《草花》を発表する。当時、岡崎市六増蔵町に在住。【文献】『近藤孝太郎とその周囲版画を中心として』展図録（岡崎市美術館 1983）／『創作版画誌の系譜』（加治）

#### 山本英春（やまもと・えいしゅん） 1880～没年不詳

『此花』第三枝（1910.3）の「現今浮世絵師」に略歴の記載あって、「師門 月岡芳年 右田年英／俗称 山本鏡之助／年令三十二（明治十三年生）／生地 東京芝区烏森町／現在 大阪市西区朝土通常源寺内」とあり、また山田奈々子著『増補改訂木版口絵総覧』（文生書院 2016）によれば、「大正になって大阪から発行された本に多くの口絵を描いている。講談本が多いようであるが、未見の作品が多く残されているという特徴がある」として、木版口絵掲載本としては精華堂書店からの稲岡奴之助著『若武者』（1906）、永井荷風著『夢の女』（1907）、『小間使い』（1908）、小栗風葉著『梢の花』（1908年）、樋口隆文堂の羽様荷香著『電 イナヅマ』（3冊 1914）、小嶋孤舟『蔭に咲く花』（3冊 1915）を上げている。【文献】山田奈々子『増補改訂木版口絵総覧』（文生書院 2016）（岩切）

#### 山本 鼎（やまもと・かなえ） 1882～1946

1882（明治15）年10月14日愛知県額田郡岡崎町に生まれる。従弟に村山槐多がいる。5歳で上京、1892年、10歳で東京・芝の木口木版彫師桜井暁雲（虎吉）の工房に年季奉公に入る。1900年、石井柏亭が印刷局の同僚たちと組んだ洋画研究グループ「紫瀾会」に入る。翌年年季が明け、報知新聞社に入社するも、写真製版が日々進化するなかで彫師としての将来に不安を感じ、また柏亭らとの交流から自ら表現することへの関心を高め、1902年東京美術学校西洋画科撰科に入学。1904年7月1日発行の『明星』辰歳第7号に、春の銚子旅行に取材した木版画《漁夫》を発表。自画・自刻であり、目次には「刀画」と明記されたこの作品が、同号の「パレット日記」に柏亭が寄せた文章「友人山本鼎君木口彫刻と絵画の素養とを以て画家的木版を作る。刀は乃ち筆なり。本号に挿したるものは是れ」とともに、自画・自刻・自摺を提唱する創作版画運動の出発点となる。1905年、9月に柏亭らが創刊した『平旦』の第3号（11月25日発行）に「西洋木版に就いて」を寄稿（翌年1月14日発行の第4号にも「西洋木版に就いて（承前）」を寄稿）。1907年、2月3日発行の『みづゑ』第21号に「版のなぐさみ」を寄稿（以後23・26・27・40号に連載）。こうした初期の論考において鼎は、自身が知り尽くした刀線の美しさを複製ではなく表現手段として活かすべく、自画自刻による木口木版を提案し、並行して素人向けに、やはり自画・自刻によるウィリアム・ニコルソン式の板目木版を推奨した。この間、1906年には和田三造から紹介されて北澤楽天の『東京バック』の仕事もしている。1907年5月、柏亭と森田恒友とともに美術文芸雑誌『方寸』を創刊。同誌は「創作的版画」



の普及を趣旨のひとつとし、3名のほか小杉未醒・平福百穂・倉田白羊・織田一磨・坂本繁二郎による木版・石版・銅版・ジंक版、あるいは混合版の挿図を満載。1911年7月10日刊行の第5巻3号まで、通巻35号を世に送り、芸術の一ジャンルとしての版画を提唱する創作版画運動の記念すべき嚆矢となった。関連刊行物である『四十二年方寸画曆』と『四十三年方寸画曆』にも参加。『方寸』はまた、その会合から1908年12月に「パンの会」が生まれる温床となり、鼎も初期の中心的なメンバーとして参加している。1907年、7月刊行の『みづゑ』第26号に《漁士街》(自画石版)を掲載。1910年、7月刊行の『みづゑ』第64号に《供養花》(水彩画石版)を掲載。1911年1月、坂本繁二郎とともに「東京版画倶楽部」を設立、版画に特化した月刊雑誌と版画展覧会を構想。雑誌と展覧会の計画は実現せず、木版役者絵集『草画舞台姿』1〜3集のみ刊行。これは前述した「パンの会」の江戸趣味を色濃く反映するとともに、廃れゆく伝統木版技術を積極的に保護・活用しようとするものであった。ほかに、渡欧前の彫師の仕事として、1905年7月刊行の蒲原有明著『春鳥集』口絵《鑄斧》(青木繁作)の木口彫版、1909年3月刊行の北原白秋著『邪宗門』挿画(石井柏亭作)の木口彫版をあげておく(『邪宗門』には挿画《真昼》も寄せる)。1912年7月、フランスとドイツで銅版・石版・木版による美術的製版や最新の印刷技術を研究するために渡欧。10月にエコール・デ・ボザールの外国人枠推薦を通過し、銅版画のアトリエでヴァルトナーに学ぶ。またシュミットの木版工房で働く。その傍ら日本の支援者たちへの返礼として木版画頒布会用の作品を制作、1912年11月に第1回作品《野鷄》を、1913年5月に第2回作品《デッキの一隅》を、同年11月に第5回作品《ブルトヌの水浴》を日本に到着させている(第3回と第4回作品は不明)。1913年10月、琅玕洞洋画小品展に木版画3点を出品。1914年、2月1日発行の『現代の洋画』第23号(版画号)に《プルーニウの小湾》図版掲載。滞欧作は、主版のない簡潔な構成と光あふれる詩情豊かな造形を示し、いずれも渡欧前の作品からの大きな飛躍を示す。その一因として、ジャポニスムの余香漂うパリで日本式の木版を試みる作家たちから気づきを得たことが考えられる。しかしながら、留学先でルノワールやセザンヌらの作品にふれるなかで次第に油絵に傾き、1914年6月頃には版画の道具を捨て、制作も、欧州の版画界の視察も断念された。パリでの版画制作は2年に満たず、頒布作として完成したものも7、8点にとどまったと考えられる。1916年4月、第16回異画会展版画部に出品。同年10月初旬にロシアで版画の展覧会を鑑賞。モスクワでトルストイの思想や児童自由画、農民工芸に感動し、1916年末に帰国した。帰国後の鼎は、日本美術院洋画部同人として油彩画の制作に励む一方(ただし1920年9月に脱退、1922年1月に「春陽会」を創立)、児童自由画運動と農民美術運動の先導者として活動してゆく。版画界では、1918年春の織田一磨からの提案を受けて6月に日本創作版画協会を結成(発起人として両名のほか寺崎武男・戸張孤雁・竹越健造が参加)、創作版画運動の重要な基盤を作り、会長となった。翌年1月日本橋三越で第1回展を開催、19点を出品。さらに、東京展終了後の3月3日発行『みづゑ』第169号に「展覧会のもの」を寄稿、協会の決議として版画技法書の発行、文展の版画受理、東京美術学校の版画科設置という三つの目標を掲げた。以後も創作版画の主導者として積極的に発言をしてゆくが(たとえば「美術時評 版画の

復興』『アトリエ』第4巻第5号/1927年5月、「帝展と創作版画』『アトリエ』第4巻第9号/1927年10月、「版画の振興に就いて』『美術新論』第5巻第6号/1930年6月、「日本版画協会会報」第2号巻頭文/1935年8月など)、作家としては1920年の名作《ブルトヌ》以後数点(《虹》《植林》《裏門》、いずれも1921年の第3回日本創作版画協会展出品)で制作を終え、新作としては1934年の「日本現代版画とその源流展」(於パリ裝飾美術館)の準備資金のために日本版画協会が主催した「自画石版頒布会」に寄せた《山鳩》(1933)1点を数えるのみである。旧作の出品としては、1922年2月の神戸弦月会主催創作版画会や1929年6月の第1回三紅会版画展があり、1930年3月に創作版画倶楽部が刊行した『第1回小学生創作版画集』への批評文掲載、1931年6月の新興版画会第1回展(創作版画倶楽部主催)審査、1932年4月の第10回春陽会展の版画公募展作品鑑別もあげておくべきだろう。ほかに、1917年頃より生涯に40点ほどを手がけたという装幀や、1924年の白井喬二「富士に立つ影」挿絵(『報知新聞』紙上で連載、ほかに木村莊八・河野通勢・川端龍子が参加)を版の仕事として加えることができようか。1931年1月には日本創作版画協会と洋風版画会、無所属の作家を合同する形で日本版画協会が成るが、鼎は副会長にとどまり、9月の第1回展にも出品していない。1932年には創作版画倶楽部主催で「山本鼎氏創作版画会」が立ち上げられたが企画のみに終わったようである。ただし、日本版画協会は、創作版画の提唱者としての鼎の顕彰を続け、1933年9月の「於巴里日本現代版画準備展覧会並第3回日本版画協会展」と翌年の「日本現代版画とその源流展」(パリ)には《野鷄》など初期作5点と《山鳩》を、1935年10月の「第4回日本版画協会展及日本現代版画米国展準備展観」では参考作品展示「初期挿絵本」のなかに『邪宗門』を展示した(この展観をもとに翌年ジュネーヴ市博物館とマドリッド近代美術館で「日本の古版画と現代版画展」開催)。さらに1936年7月から翌年にかけて米欧を巡回した「日本現代版画展覧会」でも『邪宗門』と《ブルトヌ》が出品された。そして1938年12月、第7回日本版画協会展の「版画史的展観」第1回として、織田一磨の旧作とともに22点が特別陳列され、創作版画史の先駆者としての鼎が位置づけられた。すなわち《野鷄》《デッキの一隅》《ブルトヌの水浴》《プルーニウの小湾》《セヌ河畔の村》《モデルの女》《ルクサンブル公園》《河畔の釣人》《支那の少女》《サンマルタンの冬》《ブルトヌ》《城外の子供》《アトリエの一隅》《モスクワ》《(街路)》《ヴトイユ》《香港にて(支那婦人)》《哥路》《房州の海》《高原の路》《プルーニウの入江》《水浴》である。この22点に既述した《虹》《植林》《裏門》《山鳩》および、リスト外の作品と思われる《高原の道》《ボン・ルーヴル》《つば広帽子の婦人》《ロシア風景》《フランス田園の春》を加えた30点ほどが、《漁夫》や『方寸』、『草画舞台姿』を除いた、渡欧後の鼎の一枚摺の全貌ということになるだろう。1942年に脳溢血で倒れ、その後絵筆を持つまでに回復するが、1946(昭和21)年10月8日上田市にて逝去。【文献】山越脩蔵編『山本鼎の手紙』(上田市教育委員会1971)／『方寸』復刻版(三彩社1973)／小崎軍司『夢多き先覚の画家—山本鼎評伝—』(信濃路1979)／『山本鼎生誕120年展 山本鼎その仕事—版画と装幀に光をあてて—』図録(上田市山本鼎記念館2002)／『創作版画誌の系譜』／三木哲夫編「日本創作版画運動」関連年表1904-1945』『日本近代の青春 創作版画の名品』(和

歌山県立近代美術館+宇都宮美術館 2010) / 『山本鼎のすべて展』図録(上田市立美術館 2014) (西山)

#### 山本喜内 (やまもと・きな)

1933(昭和8)年、長野県須坂では小林朝治らが講師に平塚運一を招き、「版画及び図画講習会」(須坂小学校)を開催する。翌1934年の「第2回版画及び図画講習会」(8.19~22 須坂小学校 講師:平塚運一)では臥龍山への写生会を行い、それを下絵に版画を制作。講習会を記念して『臥龍山風景版画集』(信濃創作版画研究会 1934)を発行した。山本も参加し、制作した『池畔』が掲載されている。【文献】『須坂版画美術館 収藏品目録2 版画同人誌「櫟」 「臥龍山風景版画集」』(須坂版画美術館 1999) (加治)

#### 山本 清 (やまもと・きよし)

1923(大正12)年の第5回日本創作版画協会展に木版画《風景》を出品。出品時は東京に住む。【文献】『第五回日本創作版画協会〔京都〕 展覧会目録』(1923) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (三木)

#### 山本庫造 (やまもと・くらぞう)

慶応義塾普通部2年に在学中、西田武雄の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第60号(1937.10)に銅版画《神社》が、3年生になって朝顔を描いた銅版画が第73号(1938.11)に掲載されている。《神社》は西田に「すて難き秀作」と評された。慶応義塾普通部の美術部は1934年以降、成績品展覧会を開催している。1937年11月17・18日に生徒のエッチング作品約80点が展示され、その中から選ばれて『エッチング』誌に掲載されたものである。なお山本は1849(嘉永2)年創業の東京日本橋山本海苔店の創業者山本家の出身であり、慶應幼稚舎5年の時に親類縁者の戦死を悼んだ「懐しい思出」と題する小文を『精神散華』(山本泰介編発行 1926)に寄せている。【文献】『エッチング』60・73 (加治)

#### 山本鍛太郎 (やまもと・くわたろう) 1899~1964

1899(明治32)年愛知県額田郡坂崎村久保田(現・幸田町)に生まれる。本名「鍛太郎」のほかに「桑次」「桑兒」を使用。愛知県立第二中学校(岡崎中学校)を卒業し、東京美術学校西洋画科に入学する。1924年に同校を卒業し、翌年母校の図画教師となり、1949年まで勤める。口癖になっていた言葉から「デッサン」のあだ名で親しまれた。その間、1925年に岡崎では近藤孝太郎・杉山新樹らと「我々の会」を立ち上げ、洋画展覧会を開催。その第1回作品展覧会(1926.4.14~20 岡崎図書館)に油彩画《法蔵院より見たる風景》ほか3点を発表する。同時期には近藤孝太郎の影響で、創作版画への関心も高まり、1925年3月に村松隆次と小野英一が版画同人誌『版画』を創刊。第3号からは短歌の同人誌『草原』と合併し、版画同人誌『試作』(1925~1926)と改題した。山本は『試作』第1巻2号(1925.8)から同人として参加し、「桑次」の名で木版画《夏の午后》を、第1巻3号(1925.12)には「桑兒」の名で《裸婦》《顔》、その後「鍛太郎」の名で第2巻3号(1926.7)に《母と子》《顔》を発表する。発行の遅れを解消するために第1巻3号の編集後記にあたる「きつえんしつ」も担当した。戦後は洋画家として活動する一方、杉山新樹・天野末治らと「岡崎文化協会」を設立し、演劇・

音楽・映画鑑賞など多彩な文化活動を推進した。1964(昭和39)年2月15日に逝去。当時、「岡崎市明大寺町場3」に在住。なお、生年については1898(明治31)年との資料もあり。【文献】『近藤孝太郎とその周囲 版画を中心として』展図録(岡崎市美術館 1983) / 桃山将『『試作』のことども 版画雑誌の誕生』『古本屋の蘆薈 店主たちの書物談義』(燃焼社 1997) / 『創作版画誌の系譜』 / 金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧の研究報告書 第1部 直轄学校~三重県』(金子一夫 2016) (加治)

#### 山元恵一 (やまもと・けいいち) 1913~1977

1913(大正2)年5月13日沖縄県那覇市西村に生まれる。1933年東京美術学校油画科予科に入学。本科では小林万吾に学ぶ。1934年南風原朝光の呼びかけで、同郷の画学生たちと「沖縄美術協会」を結成し、第1回展(神田・三省堂画廊)を開催して出品する。また、在学中、臨時版画教室で平塚運一に木版画を学ぶ。1938年卒業。卒業制作は《自画像》のほか《裸婦》だった。卒業後はPCL(東宝映画)でアルバイトをした後、東京市役所厚生局に勤務した。一方、1938年、美校の学生たちによって前年に結成されたグループ「貌」に参加し、第2回展(5月、銀座・紀伊国屋画廊〔以下同じ〕)、第3回展(10月)、1939年の第4回展(5月)にも出品。第3回展では事務局を務めた。また、「貌」が1938年4月頃から約1年間に亘って発行した機関誌『JEUX D' ESPRIT』の第6号(1939.2)に木版画《黒点》を寄せる。1938年12月の第7回日本版画協会展に《風景》を出品。1941年帰郷し、母校の沖縄県立第二中学校美術教師となる。1944年防衛隊に徴用され、沖縄線に参加。1945年沖縄県石川市・東恩納の文化部芸術課美術技官となり、東恩納に住む。1948年首里のニシムイに転居する。1954年モダンアート展に出品する。1956年「沖縄美術家連盟」結成、第1回展に出品する。1971年琉球大学美術工芸科教授となる。1973年第7回沖縄タイムス芸術選賞大賞。1977(昭和52)年11月4日逝去。【文献】『「グループ〈貌〉とその時代」展』図録(郡山市立美術館 2000) / 『沖縄文化の軌跡 1872-2007』展図録(沖縄県立博物館・美術館 2007) (滝沢)

#### 山本健次郎 (やまもと・けんじろう)

1925(大正14)年、岡崎では洋画への関心が高まり、創作版画への関心も高く、村松隆次や小野英一らは版画同人誌『版画』(1925)を創刊する。山本はその第2号(1925.5)に《夜》を発表。第3号からは短歌の同人誌『草原』と合併し、『試作』(1925~1926 全6冊)と改題。その第1巻1号(1925.6)に《サンタクルス》を発表した。【文献】『創作版画誌の系譜』 (加治)

#### 山本紅果 (やまもと・こうか)

1924(大正13)年の第6回日本創作版画協会展に木版画《赤土の坂道》が入選。その後も1927年の第7回展に《秋の熊野》《河内の杜》、1929年の第9回展に《入江》が入選した。なお、目録によれば、第6・7回展の出品時は和歌山県に住む(第9回展は記載なし)。その間、山本鼎の主導する「農民美術運動」に参加し、1926年の第1回九科会展(2.2~8 日本橋・三越 主催:日本農民美術研究所)に彫刻《マスク》を出品するが、出品者の区分は「組合員」となっている。また、日本農民美術研究所の講習会(詳細は不明 1926.8.1~14)の第2回夏季工芸学校

か)に参加したのか、その時に制作したと思われる《エク  
スリブリス》が1926年9月の山本鼎の「木口木版の練習」  
『農民美術』3-4 未見)の文中挿図として紹介されて  
いる。その後、1931年の第1回日本版画協会展にも《田  
園小景》が入选した。【文献】『九科会第一回展覧会目録』  
(1926.2) / 山本鼎「木口木版の練習」『農民美術』3-4  
(日本農民美術研究所出版部 1926.9) 『山本鼎生誕120年  
展』図録所収の文による) / 『大正期美術展覧会出品目録』  
(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目  
録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『山本鼎生誕  
120年展』図録(上田市山本記念館 2002) (三木)

#### 山本治平 (やまもと・じへい)

1923(大正12)年2月に神戸の山口久吉が創設した「日  
本創作版画院」の賛助員に名を連ねる。また、同年の第8  
回神戸美術展(5.23~29 神戸・工業試験場楼上)の洋  
画部に《男》を出品した。版画の制作は不明。【文献】『趣  
旨 日本創作版画院』(1923) / 『第八回神戸美術展覧会  
洋画部出品目録』(1923) (三木)

#### 山元春挙 (やまもと・しゅんきょ) 1871~1933

1871(明治4)年11月24日滋賀県膳所に生まれる。幼  
名寛之助、本名は金右衛門、円融齋・一徹居士と号した。  
十二・三歳で野村文挙、1885年森寛齋に師事、両師から  
四条・丸山派を学ぶ。1890年第3回内国勧業博覧会に《秋  
景瀑布》を出品し、褒状。1891年日本青年絵画共進会に  
審査員として《黄初平叱石図》で二等賞銀印を授賞。以後、  
同会や日本絵画協会展に出品する。1899年京都市立美術  
工芸学校教諭となり、翌年には画塾「同攻会」(1903年「早  
苗会」と改称)を開設、後進の指導に当たる。1904年京  
都府の出張でセントルイス博覧会に渡米し、翌年《ロッ  
キー山の雪》を制作。1907年第1回文展に審査員を務め、  
以後文展・帝展を中心に出品する。1917年帝室技芸員、  
1919年帝国美術院会員となる。洋画の遠近法を生かした  
写実的な山岳風景を得意とした京都画壇の重鎮である。  
版画は1897年竹内栖鳳・菊池芳文・谷口香崎等と共に描  
いた『雍府画帖』(多色木版 芸艸堂 1897)、1921年の『義  
士大観』(第8輯)に多色木版《山科の隠栖》を描いている。  
1933(昭和8)年7月12日京都市で逝去。【文献】『特別展・  
山本春挙〈湖国が生んだ京都画壇の巨匠〉』(滋賀県立近  
代美術館 1985) / 『20世紀物故日本画家事典』(美術年  
鑑社 1998) / 『版画堂 125』(2019) (森)

#### 山本昇雲 (やまもと・しょううん) 1870~1965

『風俗画報』の挿絵画家として活躍し、錦絵版画作品の  
刊行もある。1870(明治30)年11月9日(新暦換算では  
12月30日)に高知県長岡郡後免町(現・南国市)に、古  
物商山本市蔵の次男として生まれる。名は茂三郎。雅号  
は昇雲・松谷・小齋とも称した。1876年山内家お抱え絵  
師であった柳本洞素に学び、1879年には土地の有名画家  
川田小龍に学び「小齋」の号を受ける。1886年大阪へ出  
て輸出陶器の絵付け仕事に従事。19歳の1888年上京し、  
瀧和亭に入門。1894年には『風俗画報』(東陽堂)への挿  
画投稿がきっかけで、東陽堂絵画部員として入社。1912  
年12月に退社するまで『風俗画報』の専属画家として  
活動し大いに知られる。その後は日本画家として活動し  
1926年第7回帝展出品を最後に、世間的にはうずもれて、  
1956年8月の『美術手帖』誌上で、かつての『風俗画報』  
の画家山本松谷の生存を喜び、懐古の座談会が注目を浴

びた。1965(昭和40)年5月10日東京で逝去。出版とし  
ては、『新案松谷漫画』第一編(東陽堂 1899)、『松谷花  
鳥画譜』(東陽堂 1901)など。錦絵としては版元・松木  
平吉から「昇雲」名で、1906年以降の大判錦絵「今姿シリ  
ーズ」の《おどろき》《高砂やこの浦風に》《蚊帳の月》《つ  
るし柿》《ゆり園》《ゆきのはだ》《まりあそび》、1907年  
の《三すじ》《はなれ座しき》《絵まきもの》《ひなまつり》  
《花のさと》、1909年の《花やしき》《寒牡丹》《萩の園》《小  
蝶》などその数50数点にのぼる。また大判錦絵「子供あ  
そびシリーズ」は、1906年に24点、1907年に12点の合  
計36点。その他、昔話取材の色紙判の《狐の嫁入り》《か  
ちかち山》など多い。口絵掲載本として山田奈々子著『増  
補改訂木版口絵総覧』(文生書院 2016)によれば、1896  
年の三遊亭円朝『痴情の粉云』、『戦の結果如何ん』(共に  
文陽堂)が知られる。【参考】山本駿次郎『報道画家山本  
松谷の生涯』(青蛙房 1991) / 『浮世美人と懐かしき日  
本の情景 山本昇雲展』図録(高知県立美術館 2005)  
(岩切)

#### 山本占太郎 (やまもと・せんたろう) 1910?~没年不詳

1910(明治43)年か、熊本県に生まれる。1932年東京  
美術学校西洋画科に入学。校友会版画部に入り、同年の  
第14回版画部展覧会(7.16~17 東京美術学校講堂前廊  
下)に出品。その後の版画の発表は不明。本科では小林  
万吾教室に学ぶ。1937年石原壽市・加藤太郎・杉原正巳  
らとグループ「貌」を結成し、貌第1回洋画展(11.8~  
11 銀座・紀伊国屋画廊)に《軍鶏》を出品。出品時は「豊  
島区長崎仲町1-2385」に住む。1938年同校油画科を卒  
業し、「貌」の第2回洋画展(5.1~5 銀座・紀伊国屋画  
廊)、第3回展(10.4~7 銀座・紀伊国屋画廊)に出品。  
同年帰郷し、「熊本市練兵町2」に住む。同地から翌1939  
年の第4回展(5.8~10 銀座・紀伊国屋画廊 最終展)  
に出品。また、「貌」の同人誌『JEUX D' ESPRIT ジュ  
・デスプリ』(1938.4~1939.4 8冊か)にも時評・戯曲・デッ  
サンなどを発表した。【文献】『グループ〈貌〉とその時代』  
展図録(郡山市立美術館 2000) / 伊藤伸子「東京美術  
学校校友会版画部1928-1933」『日本近代の青春 創作版  
画の名品』展図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術  
館 2010) / 『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇  
第三巻』(ぎょうせい 1997) (三木)

#### 山本倉丘 (やまもと・そうきゅう) 1893~1993

1893(明治26)年10月12日高知県幡多郡に生まれる。  
本名は傳三郎。1918年山本春挙の画塾早苗会に入塾する  
と共に、京都市立絵画専門学校に学ぶ。在学中の1926  
年、第7回帝展に《麗日》が初入選。以後、帝展に出品。  
1933年撰科を卒業し、同年の第14回帝展では《菜園の黎  
明》が特選となる。1939年の春挙没後は「東丘社」に入り、  
堂本印象に師事。戦後は日展を中心に出品し、1966年《た  
そがれ》で日本芸術院賞を受賞。1979年日展参与となる。  
版画では『新進花鳥画集』(マリア画房 1931~33)に  
多色木版の《紫陽花》(1933)がある。1993(平成5)年  
9月5日京都市で逝去。【文献】『山本倉丘画集』(京都書  
院 1982) / 『日本美術年鑑』平成6年版(東京国立文  
化財研究所 1994) / 『山田書店新収美術目録 81』(2008)  
(森)

#### 山本桑次・桑兒 (やまもと・そうじ)

➡山本綴太郎 (やまもと・くわたろう)

### 山本独歩 (やまもと・どくほ)

1929 (昭和4)年の第9回日本創作版画協会展に木版画《肉迫戦》を出品。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (三木)

### 山本豊市 (やまもと・とよいち) 1899～1987

1899 (明治32)年10月19日東京新宿に生まれる。本名は豊 (ゆたか)。1912年錦成中学校に入学。在学中に彫刻家を志し、戸張孤雁 (1882～1927)を知る。1917年同校を卒業。孤雁に師事し、塑像を学ぶ傍ら、翌年から太平洋画研究所でデッサンを学んだ。1919年近衛歩兵第一連隊に一年志願兵として入隊。除隊後、1921年の第8回再興院展に「豊一」(1932からは「豊市」を使う)の名で《胴》が初入選し、彫刻家としてデビュー。以後、院展を中心に出品し、1923年院友、1932年同人となる。この間、1924年渡仏。アリストイド・マイヨールに師事し、1928年帰国。1930年清水多嘉示らと「大乘美術会」を結成。また、同年より日本大学専門部芸術科で講師として教えた。乾漆彫刻は、1932年頃より奈良・京都で古い仏像に接したことや、ブロンズなどの素材の入手が次第に難しくなったことを契機に、1935年頃より本格的に研究。翌1936年の第1回改組帝展に最初の乾漆による作品《岩戸神楽》を出品。以後、乾漆による独自の彫刻を展開した。版画に関しては、1922年に刊行された孤雁の『創作版画と版画の作り方』(版画社)の編集に協力し、孤雁の口述を筆記 (1919頃か、「戸張孤雁年譜」『戸張孤雁と大正期の彫刻』による)。また、1933年の『エッチング』第7号 (1933.5)の「研究所製エッチングプレッス所有者」に名前があり、同年の第3回大乘会展 (11.11～19 日本橋・白木屋)に銅版画6点を出品 (『エッチング』13)。1935年には職人との協働による多色木版《大関清水川》(30.5×20cm 限定300 未見)を制作している (『山田書店新収目録』24)。戦後は、院展に出品する一方、大河内信敬らが1947年に結成した「新樹会」に誘われ、1950年より参加。また、1951年の第1回サンパウロ・ビエンナーレ、1956年の第28回ヴェネチア・ビエンナーレなどにも出品。1961年の院展彫塑部解散後、同志らと「彫刻家集団S.A.S」を結成。1963年に「S.A.S」が国画会と合流した後は、国画会会員となり、1975年に退会するまで同会に出品。この間、1947年東京美術学校講師、1953年東京藝術大学教授となって後進を指導し、1967年に定年退官。同年から愛知県立愛知芸術大学の教授となった。1953年第5回毎日美術賞、1958年には第8回芸術選奨文部大臣賞を受賞。1983年文化功労者に選ばれた。1987 (昭和62)年2月2日東京都新宿区で逝去。【文献】「物故者」『日本美術年鑑』昭和62・63年版 (東京国立文化財研究所 1989) / 吉田朝子「山本豊市」『近代日本彫刻集成 第三巻 昭和前期編』(国書刊行会 2013) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『エッチング』7 (1933.5)・22 (1934.12) / 「戸張孤雁年譜」『戸張孤雁と大正期の彫刻』(愛知県美術館 1994) (三木)

### 山本日出臣 (やまもと・ひでおみ)

東京の料治熊太は『白と黒』『版芸術』など8タイトルの創作版画関係の同人誌を発行した。蔵書票専門の版画集『版画蔵票』(1937～1938 10冊)もその中の1誌である。山本はその第1号に《竜のおとしご》を、以後第2・3・6・8・10号にも各1点の蔵書票を発表している。また、

青森では佐藤米次郎が多く版画同人誌を発行したが、『サトウ・ヨネジロー蔵書票』『月刊蔵票』などの蔵書票専門同人誌も数種発行した。山本はそのうちの1誌『趣味の蔵書票集』(1936～1940 5冊)の第2回 (1937.8)に《能面大壺見》《古瓦》、第3回 (1938.6)に《龍》、第4回 (1939.8)に《露草》を発表。【文献】『趣味の蔵書票集』2・3・4 / 『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録 (青森県立郷土館 2001) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

### 山本光雄 (やまもと・みつお)

1939 (昭和14)年の第1回聖戦美術展に石版画《四人の斥候兵》を出品。作品解説には「昭和十二年十月中支嘉善城壁、城内残敵掃蕩の情景」とある。【文献】『復刻版 聖戦美術』上 (国書刊行会 1978) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

### 山本幸雄 (やまもと・ゆきお)

1925 (大正14)年に開かれた北海道最初の創作版画展である第1回版画展覧会 (10.25～27 札幌商業会議所主催:札幌詩学協会)に木版画《帰途》などを出品。【文献】今井敬一編『北海道美術史 地域文化の積みあげ』(北海道美術館 1970) / 『「さとぼろ」発見 大正・昭和・札幌 芸術雑誌にかけた夢』展資料集 (北海道文学館 2016) (三木)

### 山本玲子 (やまもと・れいこ)

1928 (昭和3)年、守口基隆主宰のモリス社が創刊した版画誌『NEVELON』の第2号 (8.25)に、曲線による表現主義の木版画《風景》を掲載した。この他の作品、活動については不明。【文献】『創作版画誌の系譜』(滝沢)

### 八幡栄一 (やわた・えいいち) 生年不詳～2010

長野県諏訪郡長地村 (現・岡谷市)に生まれる。長野県師範学校二部2年に在学中、同校生徒による版画同人誌『樹水』第1号皇紀2598年版 (1938)に《静物》を発表する。1939年同校を卒業。1950年頃には岡谷小学校に、その後は長野県諏訪市高島小学校・長野市立試山小学校などに勤務。教育課程研究調査全体委員長を経て、1990年岡谷市教育長に就任。雑誌『教育手帳』『信濃教育』などに多数執筆。2010 (平成22)年逝去。【文献】『樹水』1 / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) / 「八幡栄一先生を偲んで」『SUWAKO ROTARY CLUB WEEKLY』1209 (2010.1.27) (加治)

### 八幡白帆 (やわた・はくはん) 1893～1957

1893 (明治26)年東京に生まれる。平福百穂・伊東深水に師事。戦前は第7・8・11回帝展 (1926・27・30)、戦後は第1～6・10・11回日展 (1946～1955)に出品。花鳥画を得意とした。1957 (昭和32)年逝去。雑誌『新小説』第18年第4巻 (春陽堂 1913)に口絵《花の山》や江見水蔭著『三怪人』(続)・『探偵の娘』(前)などの口絵を描くほか、近藤紫雲・井川洗屋・柴田耕洋らと競作の木版画集『大正震災画集』(絵巻研究会 1926)に《その夜の呉服橋》《我家の焼跡》の制作がある。【文献】『版画にみる東京の風景—関東大震災から戦前まで—』展図録 (大田区立郷土博物館 2002) / 山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005) (樋口)